

【活動報告】

四季の森公園「自然を訪ねて～花の不思議」

日 時：5月17日（日）13：00～15：00 晴れ

場 所：県立四季の森公園 はず池・あし原湿原周辺ほか

参加者：一般21名、スタッフ5名、公園職員1名

よく晴れて暑い1日、いろいろな花の生殖戦略を学びました。

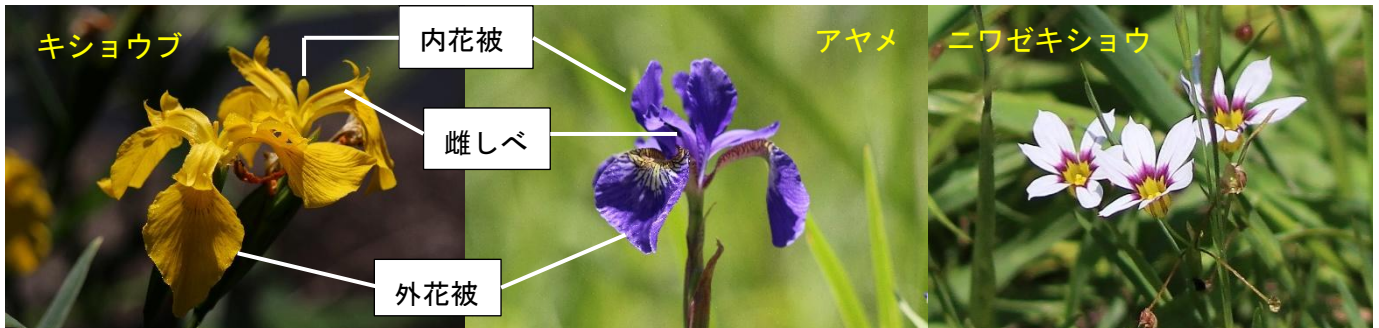
北口広場では、サツキ、ハツユキカズラ、ドクダミ、セリバヒエンソウなどの花を観察しました。



サツキの蜜標を観察しています。蜜（報酬）の在りかを虫に伝え花粉を運ばせませす。ハチやチョウは紫外線が「見える」ので人間が見る以上にはっきりとその在りかがわかるそうです。右はコマルハナバチが来たところ。蜜標は上側の花弁3枚にあり、上向きにカーブした雄しべと雌しべの上に虫が来ています。

ドクダミは、萼も花弁もない無花被花の例として紹介されました。白い4枚は苞とのこと。

園内にはいろいろなアヤメ科の花が咲いていました。



アヤメ科の花は、外花被(萼)も内花被(花弁)も花弁状で、キショウブの内花被はとても小さく、アヤメでは大きく、ニワゼキショウでは内外の花被がほぼ同じ大きさです。アヤメとキショウブは雌しべも花弁状です。

植物の多くは、雄しべと雌しべの成熟時期をずらして、自家受粉を防いでいます。



オオバコは雌性先熟で、穂の下から順に開花していきます。上部の花が一番新しく雌性期、中ほどが雄性期、下部は結実期のようにです。

ノアザミは雄性先熟。花粉が出てくる頃は雌しべは未熟で受粉できず、花粉が虫に運ばれた後に熟して他の花の花粉が受粉します。



タチツボスミレは、春に開花した花による繁殖の後、初夏に開花しない花(閉鎖花)をつけ、自家受粉による繁殖も行います。

はず池水際の植物を観察しています。もうトンボも飛んでいて、網を持った子供たちもいました。

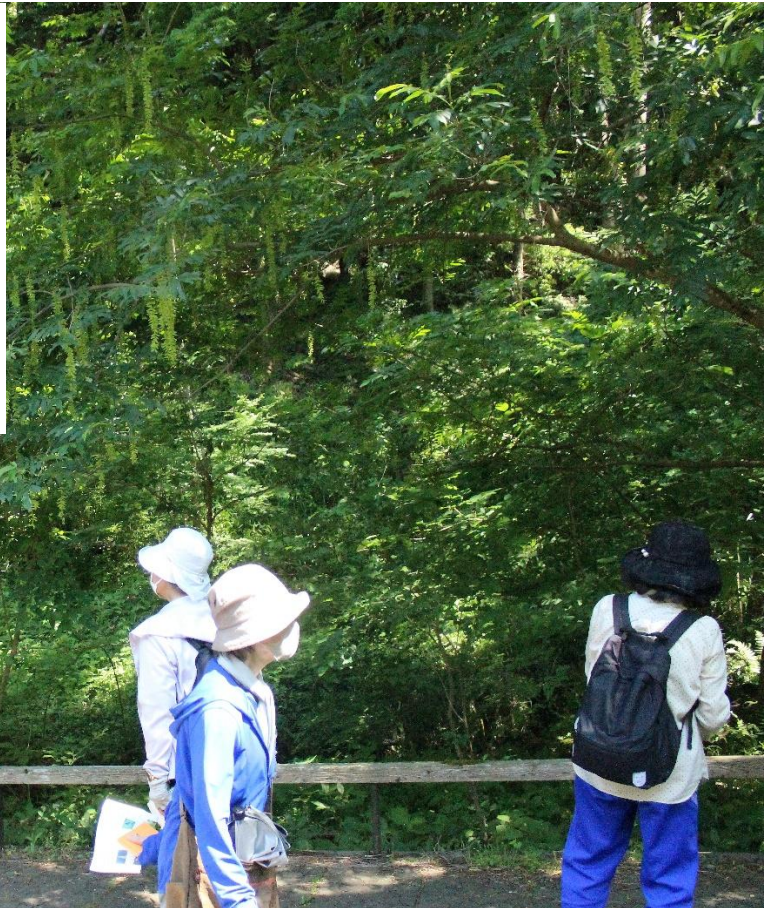


真ん中の写真は風媒花で雌雄異花のアゼナルコ。すでに結実していて、左の穂の上部で実がない部分は雄花があったところ。右の写真はショウブ科のショウブ。葉をしょうぶ湯に使います。

草花だけでなく、樹木の花や実も観察しました。



シナサワグルミの若い実



シナサワグルミにはたくさんの穂状の果穂がぶら下がっていました。そばのヒメグルミにも若い実(↓)が。

樹の花で、満開だったのはサツキとヤマボウシくらいで、ハツユキカズラも盛りは過ぎている様子でした。クルミの仲間のほか、カラタネオガタマ、ホオノキ、エゴノキ、ニワトコ、ウワミズザクラなどでは、若い実を観察することができました。ヤマグワ、モミジイチゴ、クサイチゴには、食べ頃の実もなっていました。

